溶接の技 塾やカフェで

職人の勘より論理重視

転換力

コロナ禍の在宅業務で使用していた溶接マスク（クリエイティブワークス提供）

Creative Works

（東京都江戸川区）

2012年に創業した溶接加工会社。鉄、ステンレス、アルミなどを扱い、看板や公園の遊具などの製作や加工、補修を行う。「溶接士」を育成する溶接塾、法人向けの研修、コンサルティング業務も展開している。従業員２人。資本金100万円。

江戸川区の町工場「Creative Works（クリエイティブワークス）」が、金属を溶かしてつなぐ溶接業に新風を吹き込んでいる。コロナ禍では作業をリモート化し、感覚ではなく、論理で技術を伝える「溶接塾」で「溶接士」を育成。カフェで溶接の体験会も開き、女性にも裾野を広げ、ものづくりの熱を伝えようとしている。

■大手辞め町工場へ

社長の宮本卓(46)は東京工業大大学院で金属工学を学び、大手鉄鋼メーカーに就職。研究開発などを担当した後、祖父が開いた「宮本工業所」で2010年から溶接の修業に励んだ。

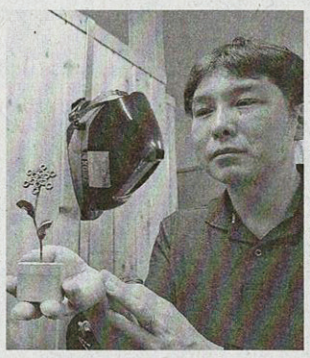
物や人を「つくる」ことを理念にしたクリエイティブワークスを創業したのは、12年のことだ。宮本工業所を解散し、18年からは、溶接の働き手を増やすことを目的に、初心者から熟練者までを受け入れる講座「宮本溶接塾」を始めた。

塾生をさらに集めようとしていた20年春、コロナ禍に襲われた。「現場に行けなければ作業ができない」と周りの町工場が次々に業務を縮小。自社の従業員の一人は、電車通勤の不安を打ち明けた。「それなら在宅で仕事をしてもらおう」

■家庭用使い在宅でも

在宅での業務に使ったのは、火花が飛ばない市販の家庭用溶接機と、カメラを取り付けた独自開発の溶接マスク。溶接工の手元の映像が社内の宮本の元に送られるため、進捗（しんちょく）の確認やアドバイスができる。

室内で作れるのは小さな部品だが、完成品は郵送などで回収し、緊急事態宣言中も生産を続けることができた。宮本は「録画でも作業が見られる。コロナという特殊な状況だからこそ挑戦できた」と振り返る。この経験が新たな試みを重ねるきっかけになった。



溶接カフェで参加者が作るオブジェの一つ「メタルフラワー」を手にする宮本社長

■「10年で1000人」

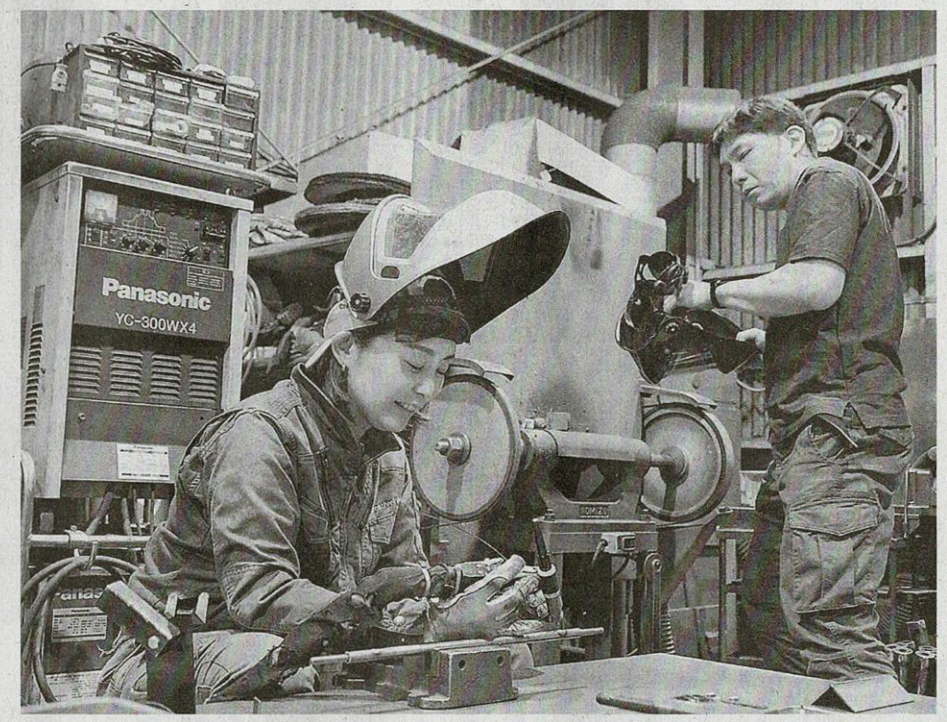
「ベテランのオジサンのイメージと異なる職人を生み出したい」と話す宮本。

DIY（日曜大工）や趣味で溶接の需要があるとみて、20年、都内の飲食店や集会場でオブジェを作ってもらう「溶接カフェ」も始めた。溶接マスクで感染対策はばっちり。コーヒーの香りが漂う中、ゆったりと金属を溶かす非日常体験は女性の人気も集めた。

都立の職業訓練校でも講師を務め、宮本は200人以上の職人を世に出している。教え子の一人、中村翠(41)は今や自社の要だ。未経験だったが、手先の器用さを生かして腕を上げ、パートから正社員に。今では塾の講師も務める。2児を育てる中村は「手に職をつけ自信が持てるようになった。三輪車や遊具など子どもが喜ぶ物を作るのはやりがいがある」と笑顔で語る。

旧来的な職人の技能は、勘や個人の感覚に頼りがち。「効率的に技能を身につけてほしい」と考える宮本は、溶接塾では、作業中の姿勢や腕の動かし方、電流・電圧の設定などを分かりやすく説明する。塾の費用は「入門コース」が約20万円で、4か月のカリキュラムで学ぶ。これまで6年間の卒業生は33人だが、「10年で1000人の卒業生輩出」と目標を高く掲げ、人材育成に一層力を入れている。（敬称略）

（増田知基）



作業する正社員の中村さん（左）と宮本社長（江戸川区で）

新たな担い手 女性にも注目

製造業における若者の割合の低下傾向が続いている。

2024年版の「ものづくり基盤技術の振興施策（ものづくり白書）」によると、製造業の若年就業者（34歳以下）は23年に259万人で02年から125万人減り、全体に占める割合は24・5%に低下した。培われた技能の伝承を途切れさせない方策が必要だ。

製造業は力仕事も多く、きついとの印象を持つ人もいる。ただ、溶接は手元での軽作業が多く、腕力はそれほど要らない。そのため女性にも注目が集まる。

高温や紫外線の放射などハードな作業環境はあるが、機材の性能やIT技術の向上が進んでいる。新たな働き手の参入を促し、効率的に技術を習得できる仕組みの普及が求められている。